2004年10・11月 合併号　Enfanter　No.298

あんふぁんて

Enfanterとはフランス語で
①子を産む ②(計画などを)考え出す ③(作品などを)創り出す の意

逐次刊行物
16.10.6
国立女性教育会館
女性教育情報センター

家は集合住宅で庭がなく、
玄関先で子どもが遊んでいたら
「迷惑だ、汚すな」と住民に怒られた。
ベランダには水道があるが、
小さい子どもを一人にさせるのは怖い。
二才近くになって、水遊びに夢中で、
台所をびしょびしょにして遊んでいる。
少しでも土の庭があったら
土や水で遊べるのにと思いつつ、
びしょびしょを拭きながら、
つい子どもを怒ってしまう。
私が小さい時は、
親が洗濯や庭仕事をしている横で、
葉っぱや花をむしって遊んでいた記憶が
ぼんやりとある。
あんなふうに子どもを育てられると
思ったのに、
外で遊ぶためにもエレベーターに乗って、
公園まで、車の多いあの道を
おびえながら歩いていかなければならない。
特に雨が続くと公園に行けなくて、
この子のエネルギーは
この狭い部屋では受け止められない。
なんでこんなに小さい子どもを遊ばせるのに
毎日、毎日、悩むんだろう…
いつからこんなに子どもを遊ばせることが
難しくなったのか…
誰も教えてはくれなかったよ。

矢郷 ■（☆）

イラスト　西宮

☆乳幼児が泥や草花で遊べる環境を育てたい
と自主保育や冒険遊び場で活動しています。

【特集】「女の勝ち組・負け組」 p 2
・あんふぁんてからあんふぁんてへ p 8
・私のあんふぁんて p 10
・映画コーナー＆図書コーナー p 11
・会員交流会報告 p 12

特集
「女の勝ち組・負け組」

★何故、この特集を作ったのか

アンケートの前文にも書いたように、きっかけは酒井順子著『負け犬の遠吠え』が話題に上っていたことです。しかも世の中的に企業の“勝ち組”“負け組”とか言われている言葉とも同調して、この“勝ち負け”という言い方がとってもイヤだった私です。イヤなものにはそっぽを向いて、我関せずのポリシーを貫いてきたのが今まで。だけど、たまたまこの本が目の前にあったため、ちょっとは読んでみてもいいか、自分とは正反対のものとも接触してみてもいいか、という余裕ある気持ちが生まれて、着手してみました。

何を目的に企画するかというと、“勝ち負け”という明確な女の分断に対して考察し、新たな“女のつながり”の肥やしにしようということです。

（古知）

★参考までに――これまでの主婦論争――

今回の負け犬論にはこれといった対立論も出ていません。朝日新聞7月16日で北原みのり氏が「女の状況を一枚岩に語られない時代だからこそ、『負け犬』『勝ち犬』と面白おかしく騒ぐ外野に対し、あえて、異を唱えたい」と寄稿しているくらいです。女の分断を考える参考までに、かつての主婦論争とやらを調べてみました。

・一九五五年あたり・・・第一次主婦論争・・・

石垣綾子氏が「男女平等の前提として、女性の職場進出やそれを受け入れる社会」を提起した。それに対して、「“母”の役割こそ女性の最たる価値」「家庭へ帰れ論」が出て論争になった。敗戦後のアメリカ占領政策による民主主義化や男女平等・女性解放への考え方の普及で、せっかく働く女性が出てきたにもかかわらず、その占領政策の転換による大企業化などで、女性の職場進出が後退しつつあった時期でもあった。

・一九六〇年代・・・第二次主婦論争・・・

磯野富士子氏が「夫の労働力や子どもという次代の労働力を生産する主婦の家事労働は経済的価値を産む」と主張。対して婦人民主新聞では「資本主義社会においては家事労働は経済的価値を生まない」と経済面から反論。さらにその反論への反論として、文化論的に「男は仕事、女は家庭」の性別分業論へと移っていく。ちょうど高度経済成長の頃であり、子育て後の主婦がパートとして再就職するという働き方が出てきた時でもあった。

・・・第三次主婦論争・・・

一九七三年の石油ショックからバブルがはじけ始め、日本経済は大転換期を迎える。対外的には一九七五年に国際婦人年が始まり「男は仕事・女は家庭という性別分業の変革、労働権の男女平等化、家事育児への男性参加、父母と社会による子どもの教育」などが主張され、各地で女性センターなどが多く設立された。しかし、国内的には一九七九年の家庭基盤充実政策や保育基本法という政策によって、三世代同居や保育や老人介護などを全て家庭が担うべきとされ、専業主婦優遇の税制などが設けられた。対女性政策において、このタテマエとホンネの二重構造にもっと注意を払うべきだったと思う。

・一九九八年以後・・・第四次主婦論争・・・

ITによるアンケートから石原里紗氏が著した本『ふざけるな専業主婦』『くたばれ専業主婦』では「専業主婦の家事は仕事ではなく趣味だ。夫に経済的に依存し、自分で税金を納めていない粗大ゴミだ」など過激に主張し、批判を呼んだ。

二〇〇一年にはNHKが専業主婦に関する討論特集を組んだ。「『一〇三万円の壁』配偶者控除は必要か？」「パートは損か得か？」「仕事と家庭の二者択一で良いのか？専業主婦の子育てに経済的支援は必要か？」の3テーマであったが、少子高齢化とリストラ不況の中、どういう方向へもっていきたいのか、おおよその予測はつくけど、実際に見ていないので不明。（誰か見た人、知っている人、意見のある人、教えて！）

そして、負け犬のこの本である。ここまでくるとおわかりのように、社会や経済界の望むところがどこからか言われ始めて、しだいに広がり、いつのまにか多くの人が自分で望んだかのように思い込む。このしくみ、しかけをしっかりと見きわめていくことが必要だ。

〔人間標本館あんふぁんて〕
＝アンケートより（回答数20名）＝

Q1。どんなに美人で仕事ができても、30代以上・未婚・子なしは『女の負け犬』なのだそうで、逆に言うと、どんなブスで仕事ができなくても、30代以上・既婚・子もちなら『勝ち犬』というわけですが、あなた自身は『女の勝ち組』と思ったことはありますか？　それはどんな時ですか？

◆そのように考えた事は無い。

◆「勝ち組・負け組」という分け方を口に出すのは「はしたないこと」だと考えてます。そのくらい嫌いな言葉です。「嫌い」と思ってる自分の心の底に、「自分は納得のいく満足感のある人生を送っている」とは思えてない、そういう自分が嫌いということがあると思います。

◆ほとんどない。「女の勝ち組」というよりは、自分には、ある程度心が通じ合っているはず（？）の夫がいる、自分を必要としてくれる子どもがいる、という状況を、うれしいと思える瞬間はある。

◆「勝ち組」と思えるほどの強い意識ではないけれど、結婚して自分の家庭を持ち、子どもを産んで家族が増えたときに、安定した自分の生き方というか、落ち着いていると感じた。

◆「勝ち組・負け組」と思ったことはあるが、「30代以上・未婚・子なし」ということでなく、美人でスタイルが良い人＝勝ち組、子どもの成績が良い＝勝ち組、ブスでスタイルが悪い私＝負け組、子どもの成績が悪い＝負け組。

Q2。その考え方は、ある意味では言えてると思う部分がありますか？　全然違うと思いますか？

◆社会が何を基準にしているかが問題だろう。学歴や収入がたくさんある事が幸せのバロメーターと言う考え方なら、あり得るだろう。だから、このような「勝ち組・負け組」的な言い方は、学歴・競争社会の現代としては、わかりやすいのでもてはやされるだろう。

◆全く違うと思います。おもしろおかしくわかりやすい表現をしているだけで、真面目に取り組む価値があるでしょうか。「美人・ブス」「未婚・既婚」「子あり・なし」なんてまるで表面だけのお話で、「人生の価値」は各人の心の内側にあるものだから。

◆全て肯定できるとは思えないけど、やっぱりある意味言えてるなぁ…と感じる。

◆結婚（既婚）・子持ちではじめて回りから一人前に扱われるという気がするので、勝ち組というより普通組なのでは。

◆言えてない。あまりにも結婚にとらわれていると思う。結婚して子どもを産んでも自分らしく生きていられないのであれば、負け組と思う。人生をエンジョイして生きてこそ、勝ち組と思う。

◆「負け犬」「勝ち犬」という2項対立的な分け方に違和感を感じる。酒井氏のいう「勝ち犬」は保守的な男女観に基づいた価値観で、賛同できない。

◆「結婚して・子持ち・専業主婦」のほうが「負け犬」のような感じがします。

Q3。あなたのまわりの30代以上・未婚・子なしの女性たちには、どんな印象を持っていますか？　彼女たちが何を考えているかとか、何に重きをおいて生きていると思いますか？

◆えらい！！しっかりやっている。自分の生活に重きをおいている。

◆仕事を生活の軸にしていて、自分の生き方を大切にしているように見えます。

◆私の周囲にはそういう人はあまりいないが、やっぱりバリバリ働いて仕事に生きるキャリアウーマンという印象がある。独身で子どももいないとなると、誰かの為に（子どもや夫など）ではなく、まず「自分」を最優先させているように思う。

◆30代・40代は仕事を持って自立していても、いつか結婚したいと心の中では思っている。（自分も40代で結婚したので、経済的・精神的に自立するのはきつかった）。

◆沢山いますが、多くは自立した“いい女”“かっこいい女性”です。精神的にも経済的にも自立し、ポリシーをもっていますね。

◆自由。責任を背負っている。私の周りはまだ独身でいる人が多く、年を重ねるにつれて自分らしく趣味をみつけて、楽しく生きていると思う。

◆必ずしもそうなろうとしてなったのではな

く、自然体で生きて来た結果という感じ。いろんな意味でのあせりがないといえば嘘になるだろうけど、それなりに幸せそうなのでうらやましくもある。それぞれの生き方だから、いいなあと思う。重きを置いているものについては、仕事だったり、両親を含めた家族だったり、他の誰かと暮らすよりは一人のんびりやりたいという気楽さだったり、のようです。

Q4。誰しも人間へのモノサシでは序列や順序をつくっているとは思いますが、あなたの価値観では、最も高いのはどんな女性ですか？ 最も低いのはどんな女性ですか？

◆活き活きと生きている女性、今の自分を好きだと思える女性。逆に、今の自分を人のせいにする人、ぐちの多い人はだめかなあ。

◆あまり「高い・低い」で論じたくないので「好き・きらい」の尺度で言わせていただきます。

好き…自分の頭で考え、自分の言葉で語り、自分の生き方や環境を自らの手でつくり上げ、実践している人。

嫌い…まわりの情報におどらされ、自らの頭で考えない、無責任で、時流にのみこまれてるだらしない人。

◆なんでもこなすマルチな女性はすごい！！と思う（女性に限らずだけど）。結婚して子どもがいて仕事もして、それ以外にも例えば趣味の○○をしてボランティア活動して、アレもしてコレもしてとかいうような人。最も低いのは、私みたいな人かな。どんくさくて要領が悪くて、考え方も生き方も不器用で、いつも周りの人たちのことが良く見えてしまう。

◆高―自分の目標、めざしていく方向性があり、地道に努力を続けていっている女性が、私にとってあこがれる存在です。

低―いつも家族・社会に不平不満があって、自分では何も行動をおこさない人。

◆高いのは、「まわりの人たちと比べず、自分自身で充実した人生を送っている人」。低いのは、「比べてばかりの人。調子よくずうずうしい人」。やっぱり「ナンバーワン」より「オンリーワン」の生き方にあこがれます！

Q5。例えばあなたの憧れの女性は？ その人のどの部分がいいのですか？

◆緒方貞子さん、白州正子さん、マリーキュリー博士、JKローリング、国谷裕子さん（NHK）、まだまだたくさん居て書ききれません。自分らしさが身についている（知性に裏づけされてる）。

◆フィットネスクラブで、バレエのクラスを担当しているK先生。臨機応変に対応できる。細やかな気配りができる。教え方がわかりやすく、親切、丁寧。やさしさと、きびしさ、両方持っている。明るい。顔が好き、スタイルもいい。その先生のレッスンを受けたあとは、「私も、仕事がんばろう」という気になる。K先生は、フィットネスの冊子の記事などから判断して「30代以上、未婚、子なし」であろうと思われます。

◆松井やよりさん…ジャーナリストとして、アジアの女性について報道し、60才で朝日新聞社を退職した後は、「戦争と女性への暴力」を無くすために、VAWW―NETジャパンを立ち上げ、活動をした。（2002年に亡くなった。）

◆特になし。そういう女性をまだ知らないのかもしれないが、今は一日一日が精一杯。

◆あんふぁんての会員。パワーがある。方向性が多様だから。

◆矢野顕子さんetc. 自分をしっかり持っている人は他の人にやさしいし、表情も豊かで年を重ねるたびに美しくなっていく気がします。

Q6。『女の幸せ』とはどんなことにあると思いますか

◆自分の選択した道が仕事なら仕事、結婚なら結婚、仕事＋子育てなら仕事＋子育て。ほかでもない、自分が選んで今の幸せ（結果）があると感じられること。

◆女と男の幸せは、やっぱり違うのかな？特に女だけじゃないけど、誰かに大切にされること（子ども・パートナー・親）。

◆「女の」とか「男の」とか「親の」「子の」などなど限定するのが、好きじゃありません。「いわゆる女の幸せ」の事ですか？一般論として定義したくないし、考えません。

◆女性にしか味わえないことが女の幸せだとしたら、やっぱり“出産”、子どもを産むことかな？

◆美しくあること、やさしくできること（そのゆとりや内面からくる輝きや暖かさ）。

Q7。最近の少子化の原因は晩婚化もしくは結婚しない症候群にある、とも言われていますが、どうして結婚しなくなってきたのだと思いますか？

◆結婚に魅力がなくなった。結婚することによって失われるものが多すぎる。経済的に自立でき、そこそこ自由に生活できる。

◆結婚しても良いことがあるとは、女も男も思えなくなったから。未婚のほうが、自由に働け、自由に遊び、お金も自分だけの判断で使える。私としては、ペアを作る楽しさもあると思う。

◆結婚したから幸せになるというわけでもない。女性一人でも生きていける世の中になったことは喜ばしい。

◆真剣に他者とかかわると、捨てなければならなくなるものも多いからではないでしょうか。

◆結婚したくなる男性が少なく、妥協するほど女性も愚かではなくなったから。

Q8。働き出しても親と同居している『パラサイト』の子ども（？）が増えているらしいのですが、何故だと思いますか？

◆楽だから。自分でひとり暮らしすると、部屋代・光熱費を始めとする経済的負担が大きくなる事が一番の理由でしょうか。家事の負担が少ないこともあるでしょう。

◆親が淋しがって手離さない。親が子離れできてない。子どもを巣から追い出さない。子どもも居心地の良さで、いつまでも居る。お互いの利益が一致したため。

◆都市では、経済的な事情がからんでいると思う。親子の共依存（精神的）も要因の一つでしょう。

◆私もそうでしたが…。ひとり暮らしをしようと予定はたてていたのですが、仕事・あそび等次々予定をこなしていく毎日の中では、なかなかタイミングをつかめませんでした。でも今思うと、やはり家事の一部（自分の洗濯等はやっていたけれど、食事作りはおまかせだった）をやってもらえるのはラクチンだったからだろうと思います。

Q9。〈自由に生きること〉と〈結婚家庭生活〉とは相容れないと思いますか？

◆パートナーの質によってはそんなことはないと思う。

◆どんな環境・生活の中に、「自分の自由に生きること」を見出すか、つくり上げるかによって、一概に言えません。

◆結婚すれば「妻として」、子どもを産めば「母として」の役割を引き受けることになる。役割は、工夫次第で都合をつけられることもあるが、ゼロにはならない。「結婚家庭生活」を送りながら、可能な範囲での「自由」を手に入れることはできるが、シングルで生活している場合の「自由」よりは、制限されてしまうだろう。

◆性的な自由は、相容れないと思います。私の価値観にすぎませんが。

◆そんなことはない…と言いたいけど、現実はまず生活優先になってしまうから、自由に生きるは後回し…ですよね。

◆そんなことはないと思います。ただ今の私はなかなか自分が思うような「自由」な生き方にはなっていなくて、あせったりじれったかったりしています。

Q10。『孤独』になりたいと思うことがありますか？どんな時に？『孤独』はイヤだと思うことがありますか？ どんな時に？ あなたは『孤独』だと思いますか？ 自分は『孤独』に強い方だと思いますか？

◆なりたくない。適当な距離をとって（親・子・彼と）つきあっている。「孤独」には弱いと思うから、家族を大切にしている（彼も含めて）。

◆「孤独」になりたくはないですが、「ひとりの時間」は欲しいし大切です。私は「孤独」にも弱いし、ましてや「孤立」は大の苦手。

◆一日に数時間（二時間くらい）は一人で居たい。孤独でいたい。一週間も一人というような孤独はイヤ。私がどう生きているか、知ってくれて理解してくれている人が、一人はいないと耐えきれない。（電話でも良い。）　私は「孤独」に弱いほうだと思う。

◆孤独。つきつめると、“理解”なんてものが全くのまやかしだと思い至る。きっと、死の寸前「まだ死にたくない」と生命があがう時、誰も助けになどならない孤独を感じるのかもしれない。

◆結婚一年くらいまで、一人の時とは違う孤独感を感じた。夫に多くの事を求め過ぎていたのだと思う。

◆いつでも人はみな孤独だと思います。家族

がいるか否かという表面的な孤独だけじゃなく、内面ではやはり孤独であるべきだと思います。でも私はそれにとても弱い人間です。

Q11。あなたは何故、結婚したのですか？

◆一緒に居て楽な人に出会ったから。
◆この人となら自分が活かせる感じだから。
◆なりゆき。親から離れたかった。
◆自分にない長所を持っている相手が好きだったから。正直、結婚して専業主婦になると、働かなくていいからラクだろうとも思った。
◆夫が好きだったから。世間体もあるかな（年）。皆が結婚するからというのも。
◆独身をこのまま続けていても、成長出来ないと思ったので、結婚したと思います。
◆自分の家庭を作りたかったから。

Q12。あなたは何故、子どもを産んだのですか？

◆なりゆき。中絶したくなかったから。
◆子どもを産むのも育てるのも楽しく面白いのではないかと思ったから。思ったとおり楽しく面白い。
◆生んでみたかった。これもやっぱり皆が生むからというのもあるかも。（生むのがあたりまえというか）
◆子どもを持ち育てて自分の家庭を築いていくことが、一般的に社会に認められる生き方だと考えていたので、この考えが根っこにあってごく自然に結婚→出産→子育てとなっていったと思う。
◆一人は産んでみたかった。「女」・「母性」を実体験したかった。
◆自分の家族が欲しかったから。
◆単純に子どもが好きだったから。でも、出産し、子育てしていると「好き」という感情よりも、もっといろいろな気持ち・経験・迷い等あり、今までで一番逃げずにとりくんでいるなと、自分に驚いています。

Q13。あなたにとって、仕事とは？

◆自分らしく生きるために欠かせないもの。仕事を通して、人と関わり、緊張感を持て、自分を向上させることができる。仕事で得たお金で、やりたいことをやれる。自分の仕事に感謝！
◆生活するためには、せざるを得ない。
◆自己実現の方法：・といいつつ、今はローンの足しですね。
◆無償労働になるけど、やっぱり家事と子育てになると思う。私にとっての仕事とは、あまり思いたくない時もあるけど、でもやっぱり専業主婦である以上、これが私の仕事なのかな：・と。
◆やりたい！！仕事大好き！！悩みは常にあったけれど、仕事をしている時「楽しい！」と充実した気持ちになることが多かったです。結婚しても通勤できる所に住んでいたらやめなかったと思います。家の仕事の関係でフルタイムはムリですが、少しでも働きたい！！！

Q14。その他何でも書いてください。

◆話題の（？）『負け犬～』は本が売れるためのネーミングというか、逆説的な仕組みを感じています。男性の「未婚・子なし・仕事あり・ハンサム」を「負け犬」と言ってもインパクトはないでしょうし：・。晩婚・少子を改善したいと思っている人たちに受けるよう、そして、未婚・子なしの女性を不安にさせたいという意図があるのでは？
◆勝ち負けを声高に語るのは、あさましい。しかし、あえてあさましさを装う芸風もありかと思う。：・恥ずかしいけれど、私としてはルックスがいい方が男女問わず『優』だと思ってます。美しい女は勝ちだ。あさましやあさましや。
◆この「勝ち犬」「負け犬」は今あちらこちらで耳にしていますが、嫌な言葉だと思います。本当はこの本を読んでみた方がいいとも思いましたが、なかなか本を読む時間も作れない今、読むなら違う本を読もうと、やめました。本当は女性同士でこんな分類している時ではないと、思います。女性も男性も「自分の人生」を充実させればそれでいいし（でもそれが難しい：・）、勝ち負けより、今もっとこだわらなくてはいけないことが、たくさんあると思います。
◆男性であっても女性であっても人生を勝ち負けで表現することはとてもいやしい感じを持ちます。でも、多少のちゃかしやおふざけがあったとしても、そのニュアンスが何となく万人に伝わってくるのは、やはり勝ち負け感を誰もがもっているからでしょうね。

★8月29日の座談会に参加して

町田市

座談会の内容が、話があっちこっちに飛び、ピックアップしにくいので、文章にしました。

当日参加して感じた勝ち負け（とまわりが思っている所の）論点は、「お金と子ども」で、年金があてにならなくても子どもに頼れば、何とかなる、という世間のモノサシがある!?ということでした。

要するに、最低限の生活で我慢出来、そういう自分を認められれば、どっちが勝ちでも負けでもないだろうという方が、当日参加者の大半でした。それに、『独身のまま仕事を続けていればという結婚したことに対する後悔』を加えれば、むしろ、子どももあてにならない今、「全く逆」になるとも言えます。

最近、必然的に独身者が増えて、独身者も生き易くなってきました。だからこそ、既婚、子持ちを勝ちとせねばならない、という世間の裏の意図では、ないのでしょうか？

女達が自分の言葉で本音を語り、弱味を見せ合えば、既婚でも未婚でも、問題はないと思います。

例えば、価値観が違う主婦と私よりも、私と考え方の似た独身女性の方が仲間意識を持ちますよね。女の分断って何でしょうか？

皆様のご意見を、お待ちしております。

★特集を終えて

小平市

アンケートの答えを読むのは、とても楽しかった。何か一対一で話をしている気分がしたのです。返事をくださった方々、ありがとうございました。そして、アンケートでも設問しだいでは充実した内容になると再発見しました。（この方法で誰か、会報を作ってみませんか？そして、全員で返事に協力すれば、会報もこのまま継続できるかも。）ページの都合で全部載せられなくて、本当に残念でした。すみません。私の独断で抜粋させていただきました。

でもよく考えると、ヘンな質問が多い。Q4のモノサシの件やQ5の憧れの女性、Q6の『女の幸せ』、自由や孤独なんていうのも。でも、これらは本を読んで出てきた質問なんです。機会があったら、立ち読みでもしてみてください。

それよりも、おすすめは映画『モナリザ・スマイル』。朝日新聞で吉澤夏子氏（日本女子大教授）もふれていたけど、私も何故か『負け犬：・』と共通項を感じました。きっとビデオになると思うから、観てみてほしい。50年前のアメリカ名門女子大（ヒラリー・クリントン氏の出身校だそうだ）でのまじめな女子大生たちの悩みぶりは、あんふぁんてのみんなのまじめな悩みぶりととても似ていて、とてもわかりやすく、あたたかく、こういう風に伝えられたらいいわけねと、理想的な表現方法をみつけたうれしさがありました。

さて、当初の目的であった「女の分断に対して考察し、新たな女のつながりの肥やしに」というのは、到達できたでしょうか。上段で：・さんも言っているように、少子高齢化の現在は既婚・子持ち・パート共働きというのを勝ちとしたい世間の裏の意図を見抜いて、女達が本音を語りあうこと。それが一つの答えだと私も思います。

本当はこんな大上段に構えた目的ではなく、ひとりひとりが自分の結婚生活や生き方を振り返ってみるきっかけになればと思ったのです。そんなきっかけぐらいなら、誰でも提起できるのではないですか。

会報をつづけたい、あんふぁんてをつづけたいというのなら、具体的にアクションを起こすことだと思いますよ。

「あんふぁんてから　あんふぁんてへ」

野鳥観察舎に行ってみませんか

宇都宮市

会員の皆さんに、一度市川市の行徳にある、「行徳野鳥観察舎」に行くことをお勧めします。一九九六年頃、この会は「トヨタ財団」から資金を得てだいたい次のような研究を実行し、そのレポートを発表したとのことです。

地球は人間のためだけにあるのではありません！ここに丸浜川という川が流れています。まわりの住宅の雑排水が流れ込んでいるので、汚れた水の川です。この川の水をキレイにしてしまうというのが、その研究なのです。これがスゴイ！この川に水車をとりつけて空気中の酸素を水の中に送り込んで、水車の下流の水を清らかにしてしまったのです。ウソではありません。

ここには野鳥の保護区があって、いろいろな鳥がヒラヒラと飛んでいます。とてもめずらしいセイタカシギという鳥もいます。鳥の病院もあるので、子ども達にも見学させるとよいと思います。最近の会報によれば、保護区の中に田んぼを作って田植えやら稲刈りをして、都会の人が自然に親しみ感激しているとか。いなかの人から見ればアホのような話でもありますが…。とにもかくにも一度行ってみて悪いことはありません。東京湾の魚にやたら詳しい人もいます。

「自然保護」と言うだけなら簡単ですが、いざ「実行」となると限りなく大変です。空気をきれいにするために自動車の排気ガスを少なくなんて言いながら、観光のためにとか言って日本のあちこちで石炭たいて汽車を走らせているのは、どういうことなのでしょう。

USAでは西ヨコシマフクロウという鳥が少なくなってきたので、保護することになったそうです。けれどそのために、その山で仕事をしていた木こりの人が、立ち入り禁止になって全員失業してしまいました。日本でもそうですが、若い人はまだいいけれど年配の人の転職はたいへんだというのに。「あちら立てればこちら立たず」です。

＊「行徳野鳥観察舎」は月曜休館、日曜日に行けば鳥の好きな人がゴロゴロしています。

専門家です。東西線南行徳駅下車バス　夫婦が、鳥の

教室で赤ちゃんと

さいたま市

高等学校の授業に親子で参加してもらう事をはじめて今年で五年目です。毎年、生徒にも同僚にも好評です。教師が語るよりも、育児真っ最中の人が語る方がきっと生徒に訴えるものがあると信じています。今年は初めてお父さんが参加してくれて感激でした。普段の授業では見せない生徒の姿を見ることができて、私も勉強になります。

―生徒の感想―

☆はじめての子どもは育児にゆとりが無いため神経質になるが、二人目はおおらかになるという事を聞いて、納得した。私は次女だからそんな感じで育ったのかな？でも、私はお姉チャンより写真とか少ないんだ。

☆今日一番勉強になったのは、0歳児の発達がすさまじいと言うことです。体の大きさもしゃべる言葉の量もまったく違っていたので、驚きました。

☆私もこんなふうに育ったんだなあと思いました。千夏ちゃんのママのお話の中で「お母さんに一言ありがとうって言って欲しい」とありましたが、ちょっと恥ずかしいな。でもお母さんに迷惑をかけてばかりで悪いなと思いました。感謝したいと思います。

☆おむつを替えるところとか母乳をあげるところを生で見ることができて、勉強になりました。

―高校生とふれあう場をもって―

板橋区

普段あたりまえのように行っている子どもの世話（オムツ替え、ゲップさせる、授乳、抱っこ等）は、高校生からみたら新鮮そのものだったようで、目を輝かせ、赤ちゃんにやさしく声かけ、寄ってくる生徒さんを見て、逆にいい刺激になった。又、年令に関係なく人を引き寄せてしまう赤ちゃんパワーにも、驚かされた。

高校生が何を求めて何を知りたがっているか分からず、私自身何を話そうかと悩んでしまったが、結局、妊娠中から出産までの話し

しかできず、言いたいこと・伝えたいことがあまり出せなかったのが残念。でも私自身色々と気づかされることが多くて、子連れでいい体験ができたので良かった。また参加したいと思います。

―高校生と接して思う　父親の立場とあり方―

板橋区

今回、父親の立場から高校の生徒達を前に話すということで、「何を話したら…」と思ったが、自分自身の二人いる子ども（五才と五ケ月）との関わり方の違いや、心境、環境の変化などを語ることにとどまった。

しかしその話もさることながら、五ケ月の子を目の前にして、泣いたりわめいたり、母乳を飲んだり、その一挙手一投足を見つめて「可愛い、抱きたい、恐い」（その他いろいろな言葉）が飛び交い、終始などやかな雰囲気で、通常の授業とは違ったよい経験ができたのではないだろうか。このような機会があればまた参加して話したいし、生徒たち（倍以上年の離れた）の感覚を知りたい。

さて、私の父親論だが、結婚当初は母親が家にいて色々炊事・家事・洗濯・育児を基本的にやって、父親は（それが共働きでも）その補助的なものでいいなぁと思っていた。そして、子どもとの距離もある程度おいて、父親の尊厳を保てればいいなぁと思っていた。事実、一人目が生まれた時は家事全般はやったが、二才くらいになるまで、何もといっていい位何もしなかった。

ところが、この状態では子どもがなつかなかった。子どもと接してなかったから、自分もたまに用事があって子どもを預けられると、不安だった。物心がつき、訳のわからないことを言うと頭ごなしに怒って、けんかばかりした。このままではいけないと思い、家内にも言われ、夫婦ゲンカもよくしながら、自分との葛藤とも戦いながら関わっていくようにした。

「嫌だなぁ！」「大変だなぁ！」と思うこともあったが、家内の育児の大変さがだんだんわかってきた。こっちが変わってきたら、子どもも変わってきた。その変化が手に取るように分かる。だんだん楽しくなってきた。自分と性格がよく似ているので今でもけんかはよくするが、子どもの父親に対する信頼や安心のようなものを抱いているのも分かるので、しっかり関わって良かったと思う。

そして、五才離れた二人目の子が授かった。もう同じあやまちは犯したくないし、物理的に見ても一人で二人を見るのは無理なので、（今でこそそう思えるが、昔だったら思わなかったかも…。）しっかり関わっている（つもりだけど）。関わることが幼少の頃から少なかったり、なかったりすると、子どもの長所・短所も分からず、ある程度大きくなったら、どんな話をしたらいいか分からず相手にされなくなるかもしれない。そうならないように今のうちからしっかり関わって、何でも話し合える仲になり、信頼関係を築きあげていきたい。

近年、育児問題をとりまく環境、行政のあり方、治安の悪さ、近所などの人間関係をうまく持てないなど、母親がそんな中でストレスを感じる世の中だからこそ、父親が育児に関わり、相談相手になって協力しあっていく必要があると思う。

―高校の家庭科の授業に参加して―

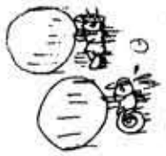
豊島区

高校生に育児のことを話す……というのだからそんなに難しい話じゃないし、と前日まであまり深く考えてなかったのですが、いざ何から話す？と考えた時、やはり新しい命が誕生した時の喜び、それがあるから、どんな大変なこともなんとか乗り越えられるということです。

目の前にいるもうすっかり大人に見える高校生たちも、ほんの十七年前はこんな赤ちゃんだったんだよ。そのことを千夏（連れて行った八ケ月の長女）を抱っこすることで実感してほしいと思いました。

授業の後で見せていただいた感想文の中に、「お母さんにありがとうってはずかしくて言えません、でもやっぱり言ってみようと思います」という文を見た時に、楽しくて、かわいいばかりじゃない育児のことを話しながら、伝えたかったことがちゃんと伝わったかなとうれしくなりました。

そして、私自身が育児に追われて過ぎていく日常の中で、ふと自分の育児を見つめ直すいい機会を得られたことが、何よりの収穫でした。



映画コーナー

★『誰も知らない』　監督・是枝裕和

カンヌ映画祭で最優秀男優賞を柳楽優弥が受賞した作品です。題材は母親に置き去りにされた四人の子ども達のサバイバル物語です。数年前に実際に起こった事件をモチーフにしていますが、フィクションだという事です。

楽しい映画ではありません。切ない、淀んだ不安を再認識させられる作品です。他人に対する無関心。それは、子どもに対しても例外ではないのです。「子どもは社会の子どもでもある」という視点が欠落した社会の不気味さが、ひたひたとせまって来ました。「生きているのは、おとなだけですか」というコピーが印象に残ります。

画面に登場する大人も子どもも、みんな厄介事にかかわり合いたくないのが見え見え。でも、私自身の中にも同じ姿があるのです。声高に批判する資格なんて無くってね。お節介ってけっこう良い事かもしれない。なんだかみんなスマートになって、人と関わらない、関われないもどかしさを感じました。淡々と四人の日常を描く中に、現代の日本社会から外れた人達の生きがたさと、かろうじてそこにしがみついている人々の現実が深く胸に残りました。（さいたま市　　）

図書コーナー

★『弟を殺した彼と、僕。』
原田正治著
前川ヨウ構成（ポプラ社）

「死刑廃止」がマスコミで取り上げられるたび、私は世の中の流れとして納得しながら、「被害者の立場に立ったら、廃止して欲しくないんじゃないか」と考えていました。

その被害者の立場とは、私の想像に過ぎなかった、いや、深く考えてもいなかったのだと、この本を読んでまず痛感しました。

加害者の人権は叫ばれるようになったけれど、被害者やその遺族の気持ちをじっくり聞いて救済する制度もなく、世間の描く「被害者の遺族像」に悩まされ続けた著者。まさに、私が冒頭に書いたような不用意な意見に憤慨してきたことでしょう。

著者は、弟を殺されたとわかった当初から（最初は事故だと処理されていて、一年たってから事件だということが判明した）死刑廃止の立場をとっていたわけではありません。当然犯人へ強い憎しみを感じ、死刑判決を望んでいました。そこから死刑廃止運動に関心を持つようになるまでの推移が、細かく書かれています。また、被害者遺族がこの運動に関わることでの苦悩もありました。

著者は、決して犯人を赦して、罪がなかったことにして死刑廃止を求めたのではありません。生きて償うことを望みました。そして被害者遺族としては異例の、加害者である死刑囚との面会にこぎつけました。直接会って、確かめたいことがあったのです。しかし、それも十分に叶わないうちに被害者の死刑は執行されます。

語り口はやわらかく読みやすいのですが、被害者やその遺族の気持ちを汲もうとしない社会や行政への強い批判が読み取れました。

また、著者の人生は弟を殺されただけでも十分凄まじいのですが、他にも数々の試練をつきつけられます。

平凡でも安らかな暮らしを望み、家庭を築いて堅実に生きてきた著者が、ある日突然崖から突き落とされるような経験をし、崖の上に這い上がろうともがき続けてきた。多くのものを失い、孤独にさいなまれながら。

この本を出すことは、著者にとって勇気のいることだったでしょう。しかし、被害者遺族自身が心情を吐露した、貴重な一冊だと思います。

さて、この本の構成担当の前川ヨウさんとは、あんふぁんて会員でかつて実名で『雑司が谷物語』を自費出版した、・・・・・・さんのペンネームです。

二十年前に「半田保険金殺人事件」で弟を殺された著者に、二ケ月に渡って聞き取りをし、膨大な資料を参考にして仕上げたとのことです。

この人の人生を取材することは、さぞかし重かっただろうと想像しています。（武蔵野市　　）

あんふぁんて30周年スペシャル

あんふぁんて私の場合

世田谷区

です。世田谷に住んでいます。パツイチで、50代中半。自活することが最大のテーマで、まちづくりのサポーターとして市民参加のプログラムや市民情報の収集やワークショップのファシリテートなどをせっせと行なっています。仕事がボランティアなのか、冒険遊び場と自主保育の活動を25年近くこれもせっせと続けています。

娘が一人います。あんふぁんてのスタート時からの長〜い会員です。なんといっても娘とあんふぁんての誕生日が1975年3月28日と同じで、このような偶然に、あんふぁんてからは足抜けできません。

50年も人生をやっていると「ここが出発点」と感じる節目が今まで数回ありまして、その一つが、まだ乳飲み子の娘を抱いて参加していたあんふぁんての会合やあんふぁんてがきっかけで始めた自主保育です。今の私から想像するのは難しいですが（笑い）、私はとっても無口で20代の初めを過ごしていました。というのも緊張した親との関係で、自分の気持ちや要求を伝えることがうまくできずに子ども時代を過ごしまして。自分ではそんなにおかしいとは思ってはいませんでしたが、今思えば、中、高校と、特に周囲との対話はほとんど成立していないという感じできました。

それでも「ここにいてはだめだ」という危機感があり「絵を習いに行く」という口実で上京。「金ない、コネない」という厳しい東京暮らしを始めました。上京して3年目に古知さんや幾代さんの女性活動グループと出会います。ですから古知さんや幾代さんとは30数年に及ぶ、これも長〜い付き合いです。

あんふぁんてでは、私と同じように自己表現が下手というか、ある意味では過剰すぎて「周囲と調和していくことが大変」という乳飲み子とペアの女性たちにたくさん出会い、それがとても励みになりました。どんなでも自分が主役で生きていくしかありませんから、みんなでドタバタしながら「私が私らしくあること」を真剣に語り合いました。ですから初期の自主保育では離婚も多かった。離婚や家族関係や再就職について子どもを脇に置いて語り合っていた、そんな子育て活動でした。子どもが幼くても深くしたたかに離婚していく仲間たちから随分と勇気をもらいましたね。育った環境の中では対をなしていない夫婦でも離婚はしませんでしたから、生きる術の選択の広がりを実感しました。

あんふぁんてでは、子ども時代の家族のあり方や私が身につけた辭や緊張について、「女性」という性の普遍的で歴史的な状況から自分一個人を見つめ始めた…そんな感じでした。出産を経て、受身でなくわかろうとした…そんな時期とも重なっていたと思います。

ですが本当に親との関係や異性との関わり方を問い直し始め、自分の歩き方を注意深く見るようになったのは40代からです。

40代で離婚。ある男性と出会い、その過程で娘との心のすれ違いを経験。自分が選択して良かれと思って行なうことでも自分を緊張させ、周囲を混乱させることがある。なぜ…そういう状況になるのか、それが私の大きな疑問として残りました。

自分のエネルギーや優しさや他人への思いやり、がんばればがんばるほど、生まれていく不具合や自己否定感。この矛盾はとても苦しかったです。

この時期に内面と外側でたくさんの旅をし、女性たちの書いた沢山の本を読みました。カナダで先住民たちの土地にも立ちました。

学んだことは、自己と大きな流れとの調和。すべてを自分で決定し行動し、結果さえも自分で導いていくのでなく、もっとおおきな力にゆだねて、その過程に感謝していくこと。自分のために自分の夢を使うこと。そのための身心のあり方など、これも書くとまたまた長〜くなります。が、そんな私を次のような場所で伝える機会を創っています。語り合いましょう。

★　★　★

◆田無（西武新宿線）でグループ展とワークショップを開催します。40代から50代の初めにかけての外側と内側の旅で受けたビジョンを絵にしています。その絵の展示と絵を使用してのワークショップを行ないます。小さな会です。子連れで構いません。

10月22日〜24日「仲間展」

22日3時〜4時「ワークショップ」

材料費・500円

連絡先・　　・矢郷

※詳細はP16情報コーナー参照のこと

2004年・会員交流会報告

8月25日（水）10時～3時半　参加者24名
於　池袋・エポック10

残暑厳しい、というより、長い夏の相変わらずの一日。恒例の「交流会」が行われた。今年は、ここ一年の会の実状に沿って、従来のままでの存続の是非も問われる、ひとつの節目の「交流会」となった。

午前中は、事務局スタッフからの「この一年の活動報告」と「来年度以降の提案」の話があった。その後、一人"3分"ということで、20名あまりの参加者の自己紹介と意見・感想など。そこまでで、昼休みとなった。

それぞれ昼食を食べつつ、午後からは「保育室」で円座を作った。床にくつろぎ、おしゃべりが果てもなく続いた。一応三時半で解散。午後は、様々な意見やら、午前中の補足に近いスタッフからの話、会員歴20年以上の人の昔話など。総会といっても、相変わらず挙手をして賛否をとるといった結論もなく、これからの展望＝「指針」へと話は落ち着いた。（'04年8・9月号のP8参照）

当日の参加者の感想・意見を中心とした原稿は、次号に掲載の予定。今号ではとりあえず、当日の報告とレポートをお届けします。

（まとめ・松井　）

【事務局からの報告】

●この一年の動き

この一年は、昨年の交流会でお金が無いぞというのを伝え、会報が隔月になるという、大きな変貌をした一年でした。スタッフの井上さんが、自宅の改装でほとんど事務局にこられない状態に、川崎さんも義母の痴呆が進行し、事務局に以前のように通えなくなりました。（注・川崎さんの状況の変化が、事務局運営上の最大の変化）

●会計報告

別紙A（あんふぁんて・30年間の会計）

B（2003年度・仮会計報告）を配布。

ここ数年の赤字平均は20万円。昨年も報告したように、予測では2004年度末には残高ゼロのはずだったが、状況の変化で会報印刷&発送費半減、事務局スタッフ費実質ゼロとなったため、8月末現在60万円の残高になっています。

しかしこのお金も、前払いの会費（22万円）、今年度の保険料（12万円）、来年3月までに発行予定の3号分の会報印刷費・郵送費などに充当すると、やはり2004年度末（2005年9月）には、残高ゼロの予測です。

なお、スタッフ費は、川崎を含め、一人一回1000円（＝発送・編集手伝い他）。九月末までの分は、該当者に支払います。

会員数は七月末現在234人だが、会の現状を報告してるので、退会者は増加傾向。

保険に関しては、預けあい中の会員に事前に通達が必須なので、ここ一年は継続です。

●事務局の実態

ここ何年か話題になっていますが、「子育てのあんふぁんて」というコンセプトは限界。

子育て中の女性の立場、視点からの発信が、今の事務局からは困難。井上さんの下の子も、今年小学校に入学しましたし。（注・これは、昨年の交流会でも取り上げられ、広く、女性という枠でいいじゃないかということでやってきた。）

最新号の"彼氏特集"も、編集意図はなかなか伝えにくかったようですが、特集を読んだ反響はおおむね良好。「他では聞けない本音がやはり、あんふぁんての魅力」と再認識したとの声があります。

●会報について

次の会報については、企画が出ない。次号までは何とか、という状態。隔月刊にしたが、この形ですら、維持は難しい。

●イベント・会合・グループ活動

「子育て広場トライアル」は会員の利用が少なく、継続不可。グループ活動も、預けあい自体が少なくなっています。（注・内容はさておき、民間の有料託児、地域の子育て支援などが、いい意味で浸透しているのか。）

●ホームページ・インターネット使用状況

電話や手紙より増えている。会員の幅が広いので、全くインターネットを利用しない人もいて、画一的にIT化するとこぼれる会員もいる。

【参加者自己紹介（数字は会員歴）】

○小嶋　（29）―子どもは29才と27才。離婚後再婚、教員をしている。あんふぁんては続けてほしい。生き方を鋭い感覚で提示したり、討論したり、政治的な意見もあるが、政党には属さない。そんなところが好きです。

○塩　（16）―中学3年の子が赤ん坊の時に入会。当初は預け合いを活発にした。子どもの手が離れ、会とも一時離れたが、最近会報の特集の手伝いなどに参加。できることをやっていきたいと思っている矢先だ。

○岸　（20）―一人娘は23才。私は保育士（不定期）。書道などやりたいことがあり、あんふぁんてはその次で、いつもお手伝いという感じでやってきた。でも、関われることはやっていきたいなと思っている。

○小澤　（4）―子育て真っ最中。あんふぁんては、子どもや夫以外の話題を話せる場で、まだ続けていきたいが…。

○杉下　（8）―本音の聞ける、世代の違う人とも話せる会です。私は会報を読むだけの会員で、発送もわずかしか行っていません。でも、解散とかしてほしくないし、今までにできたつながりを大切に続けたい。

○川崎　（25）―18年間事務局スタッフ。子育て現役世代のことが、もはや分からない。

○古田島　（15）―会報を読むだけの会員ですが、懐かしい名前など見ると嬉しい。仕事は二つ（一つは保育士）。関心があるのは、介護。姑を引き取る話をすすめているので…。

○大槻　（8）―今回の特集アンケートで言うと、「負け組」かなという感じ。会報の正直な考え方に影響を受けたりしています。会報だけでない「つながり」、今までの人脈を生かした「新しい場」を作っていけたらいいのでは？と思います。

○井上　（10）―3人の子持ち。事務局スタッフ経験あり。あんふぁんてって何だろうというのは最大の関心事ではあるんです。今日みたいに、直接人が会って話すのがいいだろうなと。今後のことは、お金のこととか、スタッフのこととか、ちょっとずつ出し合えればいいかなと。それにはなんかいい形がないのかなと、思ってます。

○福野　（18）―上の子が小2の時に入会。グループを作り、会報の特集を担当したり活動した。結婚して「何だろうこれは？」と思うことが多く悶々とし、4人も子どもがいて再就職もままならず、新聞であんふぁんてを知り、「自分らしく生きていいんだ」と気がついた。いろんな人がいて、学んだことが多い。事務局スタッフ経験あり。再就職して15年。「30周年イベント」をやろうと、また自分勝手に関わっている。私のように何も考えない人にとって、あんふぁんては貴重な存在と思うので、なくなってほしくない。

○松井　（30）―「あんふぁんて・しにあん」として、続けていけるだけやるつもり。"子育て支援"というのは、もう、ちょっと荷が重いので、自分のことを考えつつ"個人として、女性として"気になるテーマを。とりあえず、今年一杯企画だけ立ててみました。①ジェンダーフリー・バッシングについて②一泊旅行　③グループ・ホーム見学　④懇親会（12月）など。基本方針は"心の支え"です。一年間かかって、ゆっくりこれからの具体策を考えます。

○渡邊　―（4）―子どもは4才と1才。会報読むだけ会員の代表みたいな感じ。生活するだけで手一杯だが、あんふぁんてはイベントに参加するたびに刺激的で、ほかのつながりとは次元の違う話ができるので、貴重な存在。何かをやっていることの情報発信の場であってほしい。誰の犠牲にもならず、情報を流してもらうだけでも、私はありがたい。

○藤原（会員外の大学生）―今日初めて来た。子育てに関心があり、ホームページをたどって来た。皆さんの話を聞いて興味を持っている。ぜひこういう会は続けてほしい。

○庭野　（6ヶ月）―大学での研究テーマが“子育て支援”なので、インターネットで調べて入会したばかり。地域の子育て支援グループに行く人も多いが、あんふぁんてにしかできないことがある気がする。

本音を話せ、今日のような会合に託児があり、母親だけで話せる場が確保でき、色々な世代が混じっている。女の生き方について真剣に話せる、社会からこういう場がなくなるのは残念。現役のお母さんの中から引き継ぐ人が出てくるのが、理想なのでしょうけれど。

○吉長　（9）―最初の2年は事務局に頻繁に通い、特集を組むなど活動。次の3年は、時々。この4年半は就職したこともあり、年に1回「いいお産の日」に参加して、会員に久しぶりに会うくらい。

あんふぁんてが心の支えで、今も会員でいるわけで、なくなってほしくない。でも、今は仕事と子育てで手一杯。20周年のイベントの時には、世代も地域も違う人達とつながっているということに感動した覚えがある。

○伊藤　（7）―小2、5才、2才の子がいる。当時は盛岡にいて、淋しかった。居場所を見つけた気がした。特集に参加したり、ワープロ打ちを手伝ったり、イベントに参加したり…。テーマごとに皆で何かを作っていくのは楽しいなと、学んだ。いろんな年齢層がいるけれど、指導的立場でも親戚でもなく、自分の話ができるのは貴重。違う形での将来があると思う。営利団体でもないのに、今まで30年もよく続いたと思う。

○関場　（6）―子育て中にこんなことやっていられない…という、暗い時に入会した。年上のこわそうな会員の方達とも、対等に話せた。最初の頃涙ながらにしゃべったこともあったが、そしたら誰一人「我慢しろ」と言わない。しかも情報の渦。

会う人からはばんばん本音が出てきて、鍛えられた。やりたいと思ったこと（特集記事・講演会など）もできた。再就職もできた。あんふぁんてのおかげだと思う。最近は「心の故郷」みたいな気持ちでいる。

○岩上　（9）―子どもは小3と4才。自分から発信するのは苦手だが、会報を読んでいる一日があることが励み。仕事もあるのでなかなか活動できないが、子どもだけを通しての付き合いでないことが大きい。子どもを通してだけ付き合うと、本音も危うい。

個性豊かな人材ということでは、あんふぁんては他に類を見ないし、半年に一度の会報でも、年に一度の飲み会でも、あれば参加したい。

○増永　（3）―入会は、子育てが終わる頃。誘われて入ったが、役に立つことはあった。これからどうすればいいか、案はない。方向を決めてから、代表を決めて欲しい。

○大槻　（15）―地域で、子育て関連のいろいろな活動をしている。あんふぁんてにも長く関わっているが、この会は社会的にも認められているので、大事にしたい。

○古知　（30・設立メンバー）―いろいろな変遷があった。スタッフも交代しながら今までやってこられたのは、ラッキーだった。現在は、核になるメンバーがいない。エネルギーがない。月に一回のサロン風の活動はやれるかと思うが、年6000円の会費を払うだけのことはやれるだろうか？ジリ貧でも続けるか？一回精算したほうがいいか？

「子育て」がキーワードで対外的にも通っているが、それでいいのか？（昨年度の交流会では、枠を“女性”とあえて広げたが…）保険の12万円も大きい。実際には必要ないのかとも思う。女たちの会ということでは、続くテーマはあるが…。

○今井　（7）―事務局は、川崎さんと同じことをやれる人はいないと思う。その運営を考えると、解散かなあと思う。だが、現在できている関係は大事にしたいので、同窓会にしてはどうか。持ち回りで幹事を担当、名簿を管理し、会報も出すのはどうか。

○幾代　（30・設立メンバー）―当初、10年目くらいで役割は終えると思っていた。目指したものは、内容を問わなければ社会的に実現したし、個人的には、ずいぶん前から解散してもいいかなと思っている。

子育てに関しては支援ならできるが…、何かをやりたいと思っている人に巻き込まれたい気持ちはある。

【来期案―提案】と【今後の展望】

午後からは、話の中心の一つである「事務局スタッフのメーリングリスト化」をめぐり、応酬が始まった。帰着点として“ハードの管理はやれても、ソフト面は困難”という意見が多かった。現行のホーム・ページ委員会との関連も指摘され、事務局の提案のまま未決。

次にあんふぁんてらしさ、地域の子育てグループとの違い等「あんふぁんて現状維持」への会員の声も再び繰り返された。

しかし、事務局スタッフ（古知さん）からは、「子育てに関しては、お手上げ。自分のテーマをやりたい。それは、介護とかシニアの問題。」と、現状を繰り返すやりとりがあった。現スタッフの主な作業は、会報作りや発行と事務局の電話受付、会員の名簿管理と会費処理、そして、外からの通信物の振り分け作業と、それらに対する必要に応じての対応（判断業務）がある。これを一人で黙々とやるのは続かないとの本音も。

ジリ貧で、続けたとしても、続けたい個々の会員のエネルギーやスタッフの熱意次第。あと押しをしてくれるメンバーがいるのか？どうか？と。現状の限界を訴えた。

先輩会員（50代）からは、「子育てのテーマを担う子育て中の当事者が、事務局を核になって続行すること＝つまり、当事者運営の困難性」を説明する意見もあった。

20周年前後に比べ、「女性の状況」が変化したことも大きいかもしれない。主婦の再就職が難しい。女性が働き続けることも至難の業の時代が、かつてあったのだということ。

◎基本方針

A。今できることをやる（やるしかない）。
B。あんふぁんては「心の支え」である。
C。どんな形にしろ「ネット・ワーク」。
D。人間標本館＝おもしろがれる人達。
E。自分からの発信＝テーマは自由。

◎具体策

①会報―

企画が出ないため、編集作業を担うメンバーがいなければ消滅する。現在の「2ヶ月に一度発送、16ページ」という形も、変わる可能性大。とりあえず、現在の会報の形が維持可能なのは、'05年3月（300号）までの予測。公共施設・自治体等有料で会報を送っている相手への責任を果たしつつ、ひと区切りに。

②事務局スタッフのメーリング・リスト化―

具体策は未定。現行のスタッフ制は続かない。もう少し会員の情報を増やして（もちろんプライバシー上の合意の上で）、名簿を全員に配布し、事務局に頼らず自在に連絡しあい、活動するという案も考慮中。

③会費―

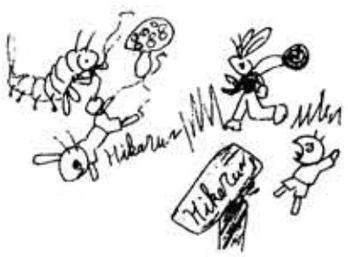
納入時期を4月と10月の2回のみにまとめて簡素化。金額は現状維持で。

④ホーム・ページの活用―

メーリング・リストはホーム・ページにもあるが、現在は一部のメンバーのみが参加しているだけ。パソコンを使いこなすメンバーの、積極的活動に委ねられている。担当してくれる人がいない限り、これ以上は無理。

⑤保険について―

「共同保育」「預け合い」のメンバーにとっては必要不可欠。これからは、あんふぁんて主催イベント（託児付き）がない限り、必要度が増すかどうか未定。資金的にはきびしいが、とりあえず今年度は現状維持とし、当事者の意見を求める。



情報コーナー

★『あんふぁんて・しにあん』の企画
一緒に参加してじっくり話しましょう
11月21日（日）グループホーム見学
新座市NPO・ぐるーぷ「えん」
（ひばりヶ丘駅バス10分・堀内）
集合・10時　西武池袋線ひばりヶ丘駅
見学後12時～2時　駅周辺でランチ
（予算1500円くらいで予約の予定）
申込み・問合せは松井　まで
℡ & Fax

★あんふぁんての仲間に会いたくなったら
神楽坂に集合！あんふぁんて土曜サロン
毎月第2土曜18～23時くらい、当日参加可
幾代宅℡ & Fax
要連絡・会費1000円程度又は持ち寄り

★「CELEBRATION」
―絵とポストカードの展示
展示　10月22日～24日「仲間展」
ワークショップ　10月22日・3時～4時
材料費　500円
会場　コール田無（西武新宿線田無駅・北口歩7分　田無神社横・西東京市田無町3の7の2
※矢郷　さんが、外側と内側の旅で受けたビジョンを表現した絵と、それを使ったワークショップです。子連れで構いません。
連絡先　・矢郷

事務局から

●ホームページアドレスが変更になりました。旧アドレスもしばらく使用可。
●交流会での話し合いの結果、今年度からW代表制は廃止し、再び幾代さんが代表を引き受けてくれました。
●会費納入時期を4月と10月の2回にまとめたので、会員全員に支払い状況や今後の振込金額等の通知を同封しました。確認してください。
●8月末の会員数は222名です。

（スケジュール・メモ）
10月18日（月）編集ミーティング
11月13日（土）土曜サロン
12月6日（月）12・1月号発送作業
12月11日（土）土曜サロン
＊編集ミーティングと発送作業は10時半から事務局で、子連れ可、弁当持参。土曜サロンは6時から幾代宅で。どちらも参加希望者は事前に連絡を。

●あんふぁんては、会費のみで運営している会。会費の支払いがまだの人は、至急振込をお願いします。会費が切れても本人から連絡がないと、退会や休会の措置がとれません。休・退会、転居の時は事務局まで連絡を。

あんふぁんてホームページアドレス http://

事務局までの地図

☆当会について詳細を知りたい場合、封書に〒・住所・氏名・☎を明記し、切手四百円分（なるべく少額切手）を送って下さい。入会希望の場合はなるべく会費六ケ月分（三千円）以上まとめて、郵便局の振替口座に払い込んで下さい。

第298号　（隔月5日発行）
2004年10月5日発行
（1975年7月26日初刊発行）

あんふぁんて　10・11月合併号

発行人 /
発行所 / あんふぁんて出版部

電話
（☎平日12時～2時それ以外FAX）
定価 / 500円
振替口座 /
加入者名 / あんふぁんての会

©本誌掲載記事の無断転載を禁じます。